

【第一弾】 神山威氏の講演内容の誤りについて (前編)

神山威氏は、二〇一四年六月十八日、韓国・釜山で開催されたUCI(別名・郭グループ)での集会において講演をし、その後も韓国各地での講演会で、天一国経典『天聖經』の批判、真のお母様に対する批判、および後継者問題などについて自説を語り、統一教会員の一体化を損ねる分裂行動をしました。神山氏はそれにとどまらず、日本でも同年九月二十一日に東京、同二十三日に名古屋、同二十六日に福岡で講演会を行い、同様の批判を繰り返し述べ、教会内部に混乱を引き起こさせる分裂行動を取っています。

神山氏の講演内容には多くの問題点がありますので、以下、その誤りを指摘いたします。皆様におかれましては、神山氏の主張の誤りについて理解を深めていただき、この問題の解決、および教会の一体化が促進されるようにご理解のほどよろしくお願い申し上げます。なお、誌面の都合上、文字数の制限があるため、より詳しくは「真のお母様宣布文サイト (http://trueparents.jp/)」をうらんください。(教会成長研究院)

注・本文中、神山氏の講演内容は「茶色」で、真のお母様のみ言は「青色」で色分けしています。

(序) 「丹心歌」について

神山氏は次のように述べます。

「アメリカ在住のある日本人

が言うのです。主権が変わったのにと。お父様は霊界に行かれて、お母様の時代になったのに、なぜ古い主権に懸命にしがみついで、お父様のみ言、み言と言

って、いつまで『丹心歌』歌っているの……と。

『丹心歌』とは、高麗が減んで朝鮮ができた時に、高麗の王様に仕えた臣下が、新しい時代の主権者ではなく、元の高麗の王様、滅びゆく王様に仕えていくと誓った歌です。……私は強く反論しました。何を考えているんだ！ 父母様は一つですよ。なぜ二つに分けて考える？」

神山氏は、上述のごとく論じた後で、「真のお父様のみ言を紹介します」と言って、下記の三つのみ言を取り上げています。

「『天地人真の父母』はお父様とお母様が二人ではなく一人である」

「お父様とお母様が、別々ではなく、一つなのである。別々に動いては減んでしまふ」  
「『天地人真の父母』は、二人が一つとなって、天地の前に現れなければならない」

まず、初めに、神山氏の発言に出てくるアメリカ在住のある日本人に対して、述べておきたいことがあります。

第一に、「基元節」以降、本格的に「先天時代」から「後天時代」となり、神様の直接主管圏時代に入っています。「主権が変わった」とは、サタンの主管圏から神の主管圏になったということであり、そのことは、真のお父様を排除して「真のお母様の時代になった」ということではありません。

「天地人真の父母様」とは、おふたりが一体なのであって、真のお父様お一人、真のお母様お一人と「分離」させて捉えるのは誤りです。

第二に、「古い主権にしがみついで、お父様のみ言、み言と言って、いつまで『丹心歌』を歌っているの」というのも誤りです。

真のお父様のみ言は、ある一時代的な真理ではなく、時代を超越した永遠の真理であり、不変的な真理であるからです。真のお父様は、次のように語っております。

言であり、人類が永遠に信奉して実践しなければならぬ天理です(二〇〇五年六月二十五日から二十八日、米国四か都市講演ツアーのみ言)

「皆様、真理の第一の属性とは何でしょうか。永遠で不変であるということ。レバエルド・ムーンが本当にこの地上に天の真理を伝え、人類を墮落の世界から救ってあげるために、天の押印を受けて顕現した救世主であり、メシヤであり、再臨主であり、真の父母であるならば、その教えは、二十年前も、四十年前も、きょう現在も一点一画の加減もない、不変の真理でなければなりません。……」

このように真の父母様の教えは、「二十年前も、四十年前も、きょう現在も一点一画の加減もない、不変の真理」です。古い主権時代の真のお父様のみ言は、過去のものであると云って軽視するのは誤りです。

私のお父様は、私の知識や哲学から出たみ言ではありません。五十年前にもそうであり、今この瞬間も、そして今後も変わりなく、私の口を通して伝えられるみ言は、天が下さる真理のみ

言であり、人類が永遠に信奉して実践しなければならぬ天理です(二〇〇五年六月二十五日から二十八日、米国四か都市講演ツアーのみ言)

次に、神山氏に対しても述べておきたいことがあります。神山氏は、アメリカ在住の日本人食口に対して、「父母様は一つですよ。なぜ二つに分けて考える？」と反論していながら、なぜ自ら「真の父母様は一つである」ことを忘れ、真のお母様を批判するのでしょうか。これは矛盾していると言わざるをえません。真のお父様とお母様が一体であるというならば、お母様

を批判することはできないはず。を批判することはできないはずです。  
(一)「遺言として残したみ言を変えた」という批判について

神山威氏は、講演会で次のように述べています。  
「私は貴いみ言を絶対視しております」「八大教材・教本を大切に、全ての問題の解決をみ言の中に求めなければならぬ」と私は思います」

このように、「み言を絶対視し」、「全ての問題の解決をみ言の中に求めなければならない」というのは、全くそのとおりであると思います。

事実、真のお父様と真のお母様は、八大教材・教本のみ言を毎朝、訓読され、その場に同参した祝福家庭に対して「み言が絶対的な基準である」という模範を示されました。

ところが、神山氏は、真のお母様が、天一国経典『天聖經』『平和經』『真の父母經』を編纂されたことに対して、次のように批判します。

「お父様が遺言として残したみ言を変えてしまふ？ それはしないでしよう。  
この世でも、親が遺言を残したら大切にしよう。それを変えて、『平和神經』が『平和經』に、お父様が愛された黒表紙の『天聖經』が赤表紙の『天聖經』に、そして父母経??話になりません」

確かに、『天聖經』は、黒表紙と赤表紙に区別されています。しかし、「八大教材・教本」を「人類のための遺言」であると宣布された「天地人真の父母定着実体み言宣布天宙大会」のみ言は、天一国経典『天聖經』および『平和經』に掲載されてお

ります。

「真の父母様は、既に人類のための遺言を準備し……永遠の人類の教材、教本として八種類の本を残しました。……『文鮮明先生御言選集』、『原理講論』、『天聖經』、『家庭盟誓』、『平和神経』、『天国を開く門 真の家庭』、『平和の主人、血統の主人』、『世界経典』、このように八種類の書籍です。この教本は、皆様が霊界に入っても読んでも、学ばなければならぬ本です。……人類を救済するために下さった天道を教える教材、教本だからです」(天一国経典『天聖經』第十三篇「平和メッセージ」一四四九ページ、『平和経』九九一頁)

このみ言が、天一国経典『天聖經』や『平和経』に掲載されているのは、「八大教材・教本」が大切であるからにほかなりません。

真のお父様が聖和された後、

先生の二〇〇巻以上の説教集が皆飛んでしまうのです。……先生の話のとおりにおこなければなりません。……人の意見で先生の話を変えることはできません」(『ファミリー』一九九三年九月号、三九ページ)

このみ言は、真のお父様が一九九三年四月十六日に語られたものです。一方、「八大教材・教本」の発表はそれよりも十七年後の二〇一〇年二月十四日です。

にもかかわらず「先生の書いた(八大教材・教本)」と述べ、まだ発表されていなかったので、「八大教材・教本」という文言を、一九九三年のみ言にカッコ付きで挿入することによって、まるで八大教材・教本を改竄しているかのような印象を与え、多くの人に誤った判断をさせようとしています。

真のお母様は、み言を「自分かつてに加減して訂正」などし

真のお母様は直ちにみ言を整理していかれましたが、それは「八大教材・教本」以外のみ言として作成して公表し、み言によって分裂と混乱を引き起こす危険性のあることを、いち早く見抜かれ、それを未然に防ぐためなのです。そして、お父様のみ言が「絶対的な基準」であることを天下に示し、「神様の下の人類一家族」を成し遂げたいためにほかなりません。

残念ながら神山氏は、その真のお母様の心中を察することができず、「み言を変えてしまう」と誤解し、お母様を批判しているのです。

神山氏は、「お父様が愛された黒表紙の『天聖經』が赤表紙の『天聖經』」になったと言っ

「基元節」以降に出版された、真のお母様によるみ言集編纂は、二〇〇〇年以降の真のお父様のみ言を含め、そのような混乱を永遠になくすためにほかなりません。

重要な点は、真のお母様は、真のお父様のみ言を整理されたのであって、いわゆる「霊的集

お母様を立てました。先生が霊界に行ったならば、お母様を絶対中心として、絶対的に一つにしなければなりません。今、お母様が行く道は、お父様が今まで立てた御言と説教集(八大教材・教本)を中心として、行かなければならないのです。他の言葉を述べるのを許しません。……どのような御言も、第二の御言を許しません！」(『祝福』一九九五年夏季号、六八ページ)

また、神山氏は、季刊誌『祝福』に掲載された次のみ言にも、

このみ言は、真のお父様が一九九四年十二月二十四日に語られたものです。ここにも「八大教材・教本」の文言を入れ、まるでみ言を改竄しているかのように印象付けようとしています。実に巧妙です。

「伝統はただ一つ！ 真のお父様を中心として！ 他の誰かの、どんな話にも影響されてはいけません。先生が教えた御言と先生の原理の御言以外には、

神山氏は、このみ言の引用に続いて、お父様が次のように語られたのだと言います。

どんな話にも従ってはならないのです。今、先生を中心として

「お父様は、『先生の言った通りに、糞つて言えば、糞つて

団や「分派」のように、お父様が語ってもおられないことを「み言である」といつて経典とされたものではありません。真のお母様は、み言の取り扱いにおいて、誰よりも誠実であります。神山氏の批判は、全く的外れなものと言わざるをえません。

(2)「八大教材・教本」という文言を挿入する問題点

次に、神山氏は、天一国経典を批判するために引用した『ファミリー』に掲載されたみ言に、

「君たちは将来、先生の語った内容、先生の書いた(八大教材・教本)内容を、自分勝手に加減して、訂正しようというような思いを持ってはなりません。そのようなことをした場合には、

て残せ。糞つてと言え、糞つて残しておけ」と言われるのである」

誠にそのとおりです。真のお母様の編纂された天一国経典は、真のお父様が語られたみ言そのものです。しかし、このような、ありのままの表現は『文鮮明先生御言選集』に残されています。したがって、あえて黒表紙と赤表紙の『天聖經』に掲載する必要はありません。

真のお母様による天一国経典は、真のお父様のみ言を御言選集から精選して編纂したものであり、改竄などしておりません。神山氏は、原文にない「八大教材・教本」という文言を挿入し、まるで改竄をしているかのように印象付けようとしています。そのことが問題なのです。